

III. 分析・対策

1) 学生の実習姿勢に関する自己評価

「問4 対象者と適切な関係を築きながら実習を展開した」の項目において、自己評価が高い結果となった。学生は、学内教育を基盤として、より専門的な臨床教育を通じて、対象者の方々との接し方、評価や介入等の具体的経験に、高い関心を寄せてていることが明確となった。本学院では、地域をフィールドとして活用した実践型学習を1・2年次から行っており、更に短・長期臨床実習前にはOSCEを実施している。多様な年代層の方々と交流をはかる機会を多く経験させていることが、対象者の尊重といった基本的教育につながっていると捉えている。

学生の実習姿勢の全4項目は、昨年度より改善が認められた。昨年度は、「問2 今までの学習内容を活用しながら実習を展開した」という項目が低い結果となり、これを踏まえて、OSCEの強化をはかり、臨床実習前の学生のスキルに関する習得意識を高め、加えて、日々の授業で習得する基礎的な知識を臨床に活用する方法について早期(1・2年次)から教育することに全教員が力を注いできた。また、授業以外の学生指導の中でも、臨床実習に臨む学生の目的意識を高めるよう指導している。

2) 学生の実習に対する評価

総合評価を除く15項目のうち、学生の基本的人権の尊重・配慮、臨床実習指導者の適切な助言・指導・説明、学生の主体的な行動といった8項目(問5～12)の平均がいづれの項目においても昨年度より高い結果となった。本学院では、学生の実習に取り組む姿勢や学内での学習状況に則した臨床実習指導を指導者に依頼している。臨床実習指導者会議や指導者・教員間の連絡を取り合う中でも、指導学生の情報を絶えず共有するようにしている。これらの取り組みの成果は、臨床実習指導者が、本学院の指導方針に理解を示し、学生の主体的な臨床実習の展開を尊重して頂いていることがものがたっている。各指導者には、今後も学生の個別性を尊重した適切な指導をお願いしたい。昨年度の評価結果に基づいて、教員・指導者間の連携の強化に取り組んできた。具体的な方法として、指導者及び学生と電話等を主とした連絡・相談体制に加えて、学習状況やその他の要因をもとに、臨床実習に苦慮することが予想される学生については、事前に臨床実習地を教員が訪問し、指導者と指導方針や方法について協議するようにした。臨床実習中にも、定期的に連絡・訪問を繰り返し、教員・指導者間の連携に力を注いだ。その結果、昨年度より改善がみられた。しかし、学生の視点では、いまだ不十分さを感じている。更に指導者・教員間の臨床実習方針・指導に一貫性をもたせるべく、平成29年度臨床実習指導者会議では、教員・指導者間によるグループワーク(臨床実習における意見・情報交換等)の機会を設けることにしている。継続して、本学院の臨床実習における指導方針を指導者に示し、学生の意見等を臨床実習に反映していく。

3) 評価項目の検討(H29年度に向けて)

H28年度(変更前)	H29年度(変更後)
問2 今までの学習内容を活用しながら実習を展開した	問2 共通分野の科目内容を活用しながら実習を展開した
問3 日々の学習を振り返りながらそれを活かして実習を展開した	問3 専門分野の科目内容を活用しながら実習を展開した
理由:	
1. 表現があいまいであるため、わかりやすくするため 2. 臨床実習における学内教育の活用の程度を分析するため	